アイルハルト・フォン・オーベルク作

『トリスタン物語』(後編)

小　澤　昭　夫訳

〔マクデブルク断片3の表〕

さて小人[1]は彼ら[2]に、
事の次第[3]を告げることになった。　3405
そこでこの小悪魔[4]は
星を見て、言った。
「お妃さまは、確かに
トリスタンを愛しておられます。
王様に、私の助言に従う意志がおありなら、　3410
あなた方にたった今申し上げたことを、
王様自身が認めざるを得ないように
して御覧にいれましょう。
もしこれが嘘ならば、
この私を、王様が命ずる　3415
どんな拷問にでも
かけるがよろしい」
彼の仲間である悪魔が、
彼の口から語ったのだと私は思う。
遂に彼は、トリスタンが　3420
仮病を使っている[5]、と言ったのである。
もしそれが本当でなければ、「私の首を斬り落とせ、
と命じて下さってもよい」と彼は言った。
そこで彼らは、直ちに彼を王の前へ連れて行き、
彼が断言したことを伝えた。　3425
「もっといいことを教えて差し上げましょう」
とこの性悪な小男は言った。
「お望みとあれば、王様御自身が
それをはっきりと御覧になれます。

御家来衆を連れて、　3430
森へ狩にお出かけ下さい。
そうすればトリスタンは、ぬけぬけと
お妃様に会いに行くでしょう。
その時には私が、彼がいつお妃様の許へ来るかを
お伝えし、　3435
御自分で真実をお知りになれる所へ
王様をお連れ致しましょう」
　(3438－43欠落)[6]
さてそこで王は、七日七晩
城を留守にすると告げ、　3445
その場に居た者達を皆引き連れて、
早速馬で狩に出かけた。
これを知って王妃は喜んだ。
　さて王は森へやって来た。
小人は　3450
トリスタンが王妃に会いに行くことを[7]
抜かり無く察知する[8]と
すぐに王に知らせた。
「王様、さあ御一緒に参りましょう。
私が申す通りになさってください」　3455
そうして二人は急いで出かけて行った。
泉の畔の菩提樹[9]の所へと。

〔マクデブルク断片3の裏〕

「王様、これからして戴くことを申し上げます」[10]
と狡猾な小人は言った。　3465
「他に隠れ場所はありません。
この上に登って、
静かになさっていて下さい。
この木の上で、
見張ると致しましょう。　3470
あの御両人がどうなるかを」[11]
月が、まるで真昼のように
明るく輝いていた。

(3474－75欠落)[12]
王は、小人が命じたように
木によじ登った。
小人も王の後から
直ぐに登って行った。
思うに、彼の同輩、悪魔サタンが　3480
彼を木に押し上げたのである。
サタンが確かに彼を後押ししたことを
私は疑わない。
というのもサタンは、彼と一緒に
自分の領国を持とうと思っているからである。　3485
さもなければ、小人がどうしてその時
一人で木に登ることが出来たであろうか。
神様が、彼ら二人を地獄に落してくれますように。
　さて彼等が木の上で待っていると
間もなくトリスタンがやって来た。　3490
彼は木の葉をちぎって小川に投げ入れ、
その後から木片を流した。
それには十字の印[13]が書かれていた。
(3494－3495欠落)[14]
トリスタンは泉に映る影を見て
頭上にこの二人が隠れているのに気付いた。
その時彼は、沈着に振舞い、
見上げるようなことはしなかった。
けれども心中ではこうつぶやいた。　3500
「残念だが、これで身の破滅だ。
王妃が、この見張りに
気付いてくれればいいのだが」
丁度その頃、木の葉と木片が
妃の部屋へ流れて来た。　3505
王妃は大急ぎで
小綱を取りに行き、
それで木片を掬い上げ、
十字の印を確かめた。
トリスタンが逢瀬の場に来ているのが[15]　3510

王妃には分った。
早速彼女はそこへ行き
勇士の姿を認めた。
けれどもトリスタンは腰を下したまま
何時になく何の素振りも見せなかった。　3515
「一体どうしたのだろう」
と王妃は思った。

〔マクデブルク断片４の表〕

「どうかしたのだろうか、あの方は。
立ち上りもしないし、
迎えに来もしないなんて。　3520
今までこんなことは無かったのに。
分らないわ、どうしてなのか」
　彼女は、それが何かの合図だと気付き、
直ぐにこう考えた。
「何かあったんだわ。　3525
誰かが近くにいて
私達を見張っているのかもしれない」
彼女が泉の畔に来てみると、
こっそり窺う者がいるのが分った。
月が、泉の水に二人の男の影を　3530
投げかけていたのである。
ここで王妃は知恵を働かせた。
彼女はそちらには目を向けず、
二人には気付いていない
振りをして、　3535
賢明にもこう語った。
「トリスタン殿、私にこちらへ来て欲しいとは何用ですか」
「お妃様、助けて頂きたいのです。
王様が、私を赦して下さり、
以前と同じように　3540
私を宮廷に置いて下さるように」
「誓って申しますが、
助けて上げられません。

王様はあなたに大変御立腹なので
私は喜んでいるのです。 3545
お役には立てないことが
お分りでしょう。
私はあなたの所為で罪も無いのに
噂の種になっているのですから。
あなたには、王様の為に好意を寄せていました。 3550
あなたは王様の甥御ですし、
他のどの人たちよりも立派に
王様の名誉のために働いて下さるからです。
今私は悪い噂を立てられています。
不当にもあなたのために[16]。 3555
王様が、今あなたに死をお命じになるとしても
私にはどうでもいいことです」
「いいえ、お妃さま、あなたの御名誉のために
私がそんな目に遇わないようにして下さい…」

〔マクデブルク断片4の裏〕

「…どうか不憫と思し召し下さい[17]、
王様が私に不当な仕打ちをなさるのを。
助けて下さるお気持さえおありなら、
私は王様のお赦しを得られるのです。 3565
王様は訳も無く
私に腹を立てておられるのですから」
すると今度は王妃が言った。
「お助けすることは出来ません。
王様があなたをお赦しなさるなら、 3570
反対はしませんし、祝福も致しましょう。
でも私から王様に頼みは致しません」
　トリスタンは言った。
「それならば、お国を立ち去る外ありません。
王様は少しもお嘆きにはなりますまい。 3575
ですが、私が不快な気持ちで
お国を出て行くならば、
もはや王様は外敵を

打ち倒すことは出来ますまい。
私にも手立はあります。　3580
暖かく迎えてくれ、身分ある人達が
私を敬い好いてくれるところへ
参るつもりです。
王様は覚えておられないようですが
国へ帰れば私は、　3585
あの方と同じ様に
権勢ある立派な王なのです。
それにまた私自身確信しています。
たとえ何処に留まるにせよ、
快く懇ろにもてなされ　3590
騎士の身支度を整えて貰い[18]
馬を与えられ、
しかも世間の恨みを
買わずに足るだけの値打ちが
私には十分あると。　3595
お妃さま、王様が御自分の名誉の為に
私という担保[19]を請け出して下さるよう
王様にお願い戴けたら、
有り難いのですが。
そうしたら直ぐにお国を立ち去ります…[20]　3600

〔シュタールガルト断片〕

「…あの方が望もうと望むまいと
この一年が終らないうちは　7065
人前であれ密かにであれ
あの方と逢わず話もなさらないと」[21]
勇士トリスタンは、即座に
握手してそれを誓った。
それからトリスタンは　7070
カーゲニース[22]を許し[23]、
（王妃への）腹癒せに[24]
彼の妹[25]を本当の妻とした。
彼女の父親[26]が彼に抱いていた憎しみ[27]も

今は忘れられた。 7075
トリスタンとその妻は
大変幸せであった。
王妃は後悔していたけれども、
トリスタンは彼女のことを気に掛けなかった。
彼の幸せは変ることなく続いた。 7080
　トリスタンが
王妃に会い、
忿懣やる方なく
彼女と別れた[28]のは
五月のことであった。 7085
これが元での王妃の大きな悩みは
聖ミカエルの日[29]まで続いた。
トリスタンに会えないことを
王妃は嘆いていた。
ペロニスが彼女にこう言った。 7090
「トリスタン殿が会いに来て下さらないのは誠に尤もです。
お妃様は、高貴なお生れのあの方を
打ちすえさせるような
ひどい仕打ちをなさいましたが、
あの方に罪は無かったのですから」 7095
「嘲っているのですね」「いいえ、違います」
「それなら嘘をついているのですか」「いいえ、滅相も無い」
「本当にそう思っているのですか」
「はい、誓って」
それを聞いて王妃は、 7100
悲しくなり、
怒りに駆られて
トリスタンの愛情を失ったのも
当然だったと
胸を痛めた。 7105
彼女は自分の罪を思っては、
嘆き悲しんでいた。
どうしたらいいかと
彼女は侍女[30]に相談した。

そうして彼女は次の様な助言を受けた。　7110
トリスタンに手紙を送り、
酷い仕打ちをしたけれども
彼の気の済むように
この償いをしたい旨、
知らせるようにと。　7115
「手紙は持たせない方が良いでしょう」
と美しい王妃は言った。
「私の使いの者が手紙を持っていると
捕えられるかもしれません。
そうなれば、あの品性下劣な連中が　7120
大喜びすることでしょうよ。
だから使者には
手紙を持たせないことにします。
一緒に考えておくれ、
誰を遣わしたらいいか。　7125
私の為に最善を尽してくれる者を」
　さて宮廷に一人の小姓[31]がいた。
見目麗しく聡明で、
評判も良く
王妃も彼をよく知っていた[32]。　7130
この小姓、名をピローゼといった。
王妃は彼を召し出して、
悩みを訴えた。
「お願いがあります。頼めるのはあなただけです」
「では早速お聞かせ下さい」　7135
「でもまだ早過ぎます」
「いいえ、お妃さま、そんなことはございません」
「それでは話しましょう」「どうぞお気に召すままに」
「してくれますか」「まだ伺っておりません」
「是非して欲しいのです」「それならばお聞かせ下さい、　7140
私に出来ますかどうか」「出来ますとも」
「それでは、お引き受け致しましょう」「まあ嬉しい。
どうやってこのお礼をしたものかしら」
「これまで十分にお引立戴いております」

「それでは願い事を打ち明けましょう」「さあ、どうぞ」 7145
「私の計画をよく聞いて下さい。
私はひどく辛い目に遇っています。
それであなたに助けて欲しいのです。
激怒のあまり私は
トリスタン殿の愛を失いましたが、 7150
それも無理はありません。
あの方が一度、二度と殴られるのを
私は見ていました。
私に分別があれば、
泣いて悲しむべきでした。 7155
けれども、声を立てて笑ってしまったのです。
これが原因で
もう長いこと私は
あの方の愛情を失ったままです」
王妃は更にピローゼに言った。 7160
「それで、あなたに使者になって欲しいのです。
このお礼は十分に取らせますから、
安心なさい。
あなたが使者に立ってくれるなら、
お慕いする胸の内を伝え、 7165
会いたさを堪え忍んでいるこの苦しみを
あの方に訴えておくれ。
私は、粗皮の肌着[33]を
直に着ています。
あの方への罪滅ぼしにです。 7170
愛しいあの方は良く御存じです。
夜も昼もこの粗皮の肌着を
着ていたら、
私の高貴な柔肌は
耐えられないと。 7175
それでもあの方のお気持ちが変らないのなら
言っておくれ。
これをいつまでも着ていて
決して脱がないと。

それにまたこうも伝えておくれ。　7180
あの方に会いたくて切ないあまりに
私がもうじき死ぬかもしれないと、
あの方が慈悲を示してくれなければ、
生きてはいけないと」
「ねえ、ピローゼ」王妃は言葉を続けた。　7185
「あの方の愛情を取り戻してくれるなら、
いつまでもあなたの働きに報いてあげますよ」
さてこの小姓は、コーンウォールの国から
トリスタン殿の許へと
すぐに旅立って行った。　7190
こうして彼が、眼前に町が見える程
カレヒト[34]の近くまでやって来ると、
勇士トリスタンは
街道脇の野原で
鷹狩をしていた。　7195
彼はすでに白い鳥を
捕えており、
思い通りの狩が出来て
喜んでいた。
ハイタカもまた　7200
獲物の鳥を食べ終えて、
嬉しげに
彼の手に止まっていた。
勇士トリスタンは、
ピローゼが街道を歩いて来るのを見て、　7205
すぐにこう思った。
あれはどうやら使者らしい、もしかしたら
何か知らせが聞けるかもしれないと。
それでトリスタンは彼を迎えに行った。
すると小姓もこれに気付いて　7210
彼の方へ歩いて来た。
彼はこの小姓から、
自分の知らないことを
巧く聞き出すつもりであった。

二人は出会うと　7215
互いの顔を見て
相手が誰か直ぐに判った。
トリスタンは、
ピローゼを歓迎し、
王妃はどうしているか　7220
と尋ねた。
ピローゼは答えた。
「お妃様は、哀れな女のように過ごしておられます」
「それはまた何故だ」「あの方は、あなたが原因で
今にも倒れそうになっておられます」　7225
「しかしどうして」「あなたのお怒りを恐れておられます」
「本当なのか」「はい、本当です」
「その必要はないのに」「それでも後悔しておられるのです」
「しかし何故だろう」「その訳は良く御存じの筈です」
「いや、分らない」「あの方を恨んでおられましょう」　7230
「何か知っているのか」「はい、よく存じております」
「その話をする気なのか」「そう言い付かってきました」
「ならば話してみなさい」「お妃様は、あなたが殴られるのを
御覧になりました」「その通り」「憤慨なさいましたね」
「悲しかったのだ」「ご尤もです」　7235
「今でもそうだ」「でもそれではいけません」
「忘れろと言うのか」「そうです」
「忘れられるものか」「余程傷ついておられるのですね」
「傷つくどころではない」「胸が抉られるほどに」
「その通りだ」「そのことであの方は苦しんでおられるのです」　7240
「苦しいのは私の方だ」「もう苦しみは去ったでしょうに」
「いやまだだ」「あの方を更に打ちのめすおつもりですか」
「一体どういうことだ」「あの方を避けておられるからです」
「あの人にはそれが好ましい筈だ」「そんなことはありません」
「いや、そうだと思う」「いいえ、違います」　7245
「それでも以前はそうだった。
あの時は、あの方が命じたのだ。
私を殴りつけ、蹴り飛ばし、
追い払うように。

その時には、あの方はちっとも辛くはなかった筈だ。 7250
それを見て高笑いしていたのだから」
「お妃様はこれから先、あなたの命ずるままに、
その償いをなさるおつもりです。
多くの人達が過ちを犯し、
償いをして赦されております。 7255
慈悲が正義に勝るからです。
あの方は慈悲を求めておられます。
あの方のお気持ちを受け入れてあげて下さい。
あなたに加えた苦しみを
あの方は償いたいのです。 7260
正義に照らしてではなく、慈悲に照らしてです。
あの方は、あなたと争うことは出来ません。
あなたの慈悲を求める他には
何の考えもお持ちではありません。
あの方は、御自分の罪が償うには重過ぎる、とお思いです。 7265
だからこそ、敢えて私を使者に立て
あなたへの忠誠心をお示しなのです。
あなたがお望みのことなら
何でもする
と言っておられます。 7270
その上あなたへの罪滅ぼしに
粗皮の肌着を
素肌に直に着ておられます
何時までもあの方を避けなさるなら
あの方が苦しみから救われることはありません。 7275
トリスタン殿、どうかお願いでございます。
お妃さまのところへ、お出かけ下さい。
そうしたらあの方の苦しみは和らぐのです」
(7279－7280欠落)[35]
「あの方には会いたくない。
この前我が身に起ったことが
また起らないとも限らない。
お会いできない」とトリスタンは言った[36]。 7284
「お約束いたします。 7287

お妃さまが、あなたのお望みのままに
心の傷を癒して下さると」
「いや、私は行かない。 7290
私には何も得るものはない」
「お妃さまのために
いらして下さい。
是非ともそうして頂かねばなりません。
あなた御自身の勇気のため、 7295
お妃さまの、あなた故の
激しい苦しみのためにも。
(7298－99欠落)[37]
何しろ、あの方は粗皮の肌着を 7300
直に着ておられるのですから。
あなたは、お妃さまの大事なお方です。
あの方がこれまでに遇った誰にもまして。
あなたの寛大な心に免じて
あの方の苦しみを哀れと思し召し、 7305
惨めなあの方を慰めてお上げ下さい」
「ピローゼ、立派な使者だ、君は。
考え直してみよう。
あの方が悔んでいて
私に来て貰いたがっていると 7310
本気で言うのだな」
「お妃様は後悔しておられます、本当です。
あれ程激しい悔み方は見たことがありません」
「あの方には憤慨していたが、
今は好意を寄せることにしよう」 7315
「神様があなたに報いて下さいますように」
「これから言うことをよく聞いてくれ。
粗皮の肌着を脱ぐように、
あの方に伝えてくれ。
それ程あの方を恨みはしなかった、 7320
長い間善くも
そんな肌着を着ていること
に免じて許す、

それでもう私には十分だと。
慈悲の為にあの方を迎え入れよう。　7325
そして君が立派な使者だと
あの方にお聞かせしよう。
このことなら聖なるキリスト様が
一番良く御存じでいらっしゃる。
あの方にきっとお伝えしてくれ、　7330
約束を果したらすぐに
あの方の許へ参るつもりだと、
それがわたしにとって有益であろうと
破滅のもとになろうと。
それより早くには無理だ。　7334 a
王妃に言ってくれ給え。　b
私は約束してあるのだ、　7335
あの方を一年間は避けると。
あの方が望もうと望むまいと
私を見ずにすむように。
その一年が過ぎたなら、
私が参上するものと、　7340
お妃さまは、確信なさっていい。
五月には行くから」
　それを聞いてピローゼは
嬉しいと同時に悲しくなった。
トリスタンが王妃を許してくれたのは　7345
嬉しかったが、
約束通り、この一年が終るまで
王妃に会う気が無いのは
悲しいことであった。
それでピローゼは言った。　7350
「トリスタン殿、さようなら。
これでお暇して、
お妃さまには
ここで伺ったように
喜びと悲しみをお伝えします」　7355
「私が君を知らないことにして

すぐに私の家へ行きなさい。
そして私からの贈り物を求めなさい。
この国ではそうするのが習慣で、
そうしたら君に然るべき物を　7360
与えるよう命じるから。
それからすぐに出発しなさい。
そしてお妃さまに言ってくれ給え。
どうか私のために
粗皮の肌着を脱いで、　7365
絹の肌着を着るようにと。
私が言った通りに伝えるのだぞ」
ピローゼは神に感謝し、
命じられたようにした。
トリスタンは彼に　7370
スターリング貨幣で
100シリング[38]を与えさせた。
　こうしてピローゼは別れを告げ、
誰にも素性を知られることなく
宮廷を後にした。　7375
その頃、その国のある町で
年の市が開かれていた。
そこへ行く道を教えてくれと
ピローゼはトリスタンに頼んだ。
コーンウォールの或る町も　7380
これと同じ名であった。
皆さんにお知らせ申し上げるが、
それはどちらも
サン・ミッシェル・アラグレーヴ[39]というのです。
どちらも丁度同じように豊かで、　7385
同じくサン・ミッシェル（聖ミカエル）の祭日に
年の市が開かれていました。
以前そこでは毎年
賑やかな市が開かれていたものです。
さてピローゼはそこへ出掛けて行き、　7390
欲しい物を買い求めた。

彼はすべきことをしたのである。
用事を済ませると
直ちに彼はそこを立ち、
海を渡って国へ戻った。　7395
鹿のように足が速ければ
心底嬉しかったであろうが、
それは叶わぬことであり、
人として歩まねばならなかった。
彼がティンタリオール[40]に着き、　7400
王の前に出向くと、
王と王妃は
暖かく彼を迎えた。
王は彼に尋ねた。
どこから戻って来たか、　7405
どこでこの富を手に入れたか、
なぜそんなに金持ちになったのかと。
このとき王妃は、ピローゼが
何か都合の悪い事を言うのでは、とひどく恐れた。
全身に冷汗が　7410
吹き出し、
不安でならなかった。
　王妃が心配しているのが
ピローゼにはよく分った。
そこで用心深くこう話した。　7415
「王様、
辛抱強く耐えられる者は、
しばしば経験するものです。
心楽しくなり、
嬉しい事と良い事が　7420
二つとも起こるような日を。
年の市の日に私は
サン・ミッシェル・アラグレーヴの町におりました。
そこで私はこの富を手に入れ
今はこんなに金持ちなのです」　7425
皆はこれを聞くと、

彼がこんなことを言うのも、
以前より暮し向きが
良くなったからだ、と思った。
けれども王妃だけは、彼がこの言葉で　7430
何を言いたいのか、忽ち気付いた。
喜びのあまり彼女は泣き、
目から涙があふれた。　7432 a
王妃がそれからどうしたか、さあお聞きあれ。　7432 b
彼女は私室に戻った。
彼女の許へ
小姓のピローゼが早速やって来て、　7435
トリスタンから命じられたことを
伝えた。
それを聞いて彼女は、いつも惨めな気持ちでいたことを
すっかり忘れてしまった。
けれども、王妃が知る中で　7440
一番好ましい男に、
今年の冬が終るまでは
会えないのが、
大変辛かった。
　五月が来ると直ぐに　7445
トリスタンは灰色の服を着、
足には爪先の丸い靴[41]を履き、
頭陀袋を肩に掛け、杖を持ち、
巡礼者を装った。
クルヴェナルもまた　7450
彼と同じ服装をした。
それから二人は
ティナス殿[42]の館へ忍んで行った。
けれども彼は馬で出掛けており、
二人は会うことが出来なかった。　7455
そこでトリスタンは、
どうしたらいいのか考えて、
こう決心した。
街道の辺りへ行き、

使いをしてくれそうな者を　7460
捜そうと。
さてこの巡礼者[43]は
茨の茂みに寝そべった。
そこは以前にも彼がカーゲニースと一緒に
寝そべっていた場所であった。　7465
人々が多数行き来するのを
彼は見ていた。
けれども王妃への伝言を
頼めるほど
信用出来る者を　7470
見付けられなかった。
王妃に会えぬまま
一晩中彼はそこに留まっていた。
夜が明けるとすぐに
彼の親友ティナスが　7475
ただ一騎でそこを
通り掛かった。
この友人は馬上でぐっすり眠っていて、
目の前の茨の茂みに
トリスタンがいるのにも　7480
気が付かなかった。
それでも友人は、彼の方へ進んで来た、
まるで彼と話をしたいかのように。
トリスタンは、友人が目覚める前に、
眠りを破りたくはなかった。　7484 a
側に導く者がいなくても　7484 b
友人はしっかりと馬を歩ませていた。　7485
彼がこの友人を眠らせておいたのは
育ちの良さを示すものだった。
彼は、この友人が恋人と一夜を
過してきたのだろう、と思った。
友人の眠りを破るぐらいなら　7490
むしろ使者を頼むのを
諦めてもよかった。

彼は、馬のたてがみを摑むと、
友人の目を覚まさないように
並んで歩いて行った。 7495
暫くすると、馬が何かに驚いて
道を逸れてしまった。
すると友人は目を覚まし、
トリスタンを認めた。
かくして勇者二人は 7500
大いに喜び合った。
友人ティナスはトリスタンを
心から歓迎して、
率直にこう言った。
トリスタンが何事かを欲していて、 7505
自分にそれをして貰いたいのなら、
喜んで引き受けると。
「そうなんだ、是非とも君に頼みたい。
私の使者を勤めてくれ給え」
「やりましょう、 7510
誠意を尽して」
「神様がそれに報いて下さるように。
さあ、この指輪を取って、
王妃が信用するように
持って行ってくれ給え。 7515
そしてあの方に言ってくれ給え。
私がこの地に来ていて、会いたがっていると。
王様が、白木が原[44]の草地へ
狩りに出掛けるよう、
あの方が熱心に頼んでくれないことには、 7520
これは叶わぬことなのだ。
私が寝そべっていたあの茂み、
あの方がこの前私を見た所に
今度も寝そべっている、と伝えてくれ給え。

(断片 St は、7524行で中絶している)

小　澤　昭　夫

テキスト・参考文献（前編の末尾に既に示したものは除く）

Gottfried von Straßburg: Tristan. Nach dem Text von Friedrich Ranke neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn. Band 3: Kommentar, Nachwort und Register. 1980. (Reclams Universal-Bibliothek 4473)

Wolfram von Eshenbach: Parzival. Herausgegeben von Albert Leitzmann. (Altdeutsche Textbibliothek Nr. 12-14)

Wolfram von Eschenbach: Parzival. Mittelhochdeutscher Text nach der Ausgabe von Karl Lachmann, Übersetzung und Nachwort von Wolfgang Spiewok. 1981. (Reclams Universal-Bibliothek 3681/2)

小竹澄栄訳「トリストラントとイザルデ」（ドイツ民衆本の世界VI）国書刊行会、1988年．これは、前編の参考文献に挙げたトリスタンの散文民衆本 Tristrant und Isalde, Prosaroman. Hrsg. von A. Brandstetter. 1966. (ATB Ergänzungsreihe 3) の全訳である。

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ、加倉井・伊東・馬場・小栗共訳「パルチヴァール」郁文堂、1974年

ベディエ編、佐藤輝夫訳「トリスタン・イズー物語」岩波文庫、1953年、1985年（改版）

注

1）原文ではただ er であるが、3450行には der wenige man と記されている。ベルール作ではフロサン Frocin として、ゴットフリート作ではアキターニエンの小人メロート Melot petit von Aquitan（14244）として登場する。この人物は、3407行から分るように、占星術に長け、夜空の星を見て秘密を知ることが出来るのである。しかしゴットフリートはこの点を認めていない（14242－53．行数は Bechstein/Ganz 版による）。

2）マルケ王の臣下で、トリスタンを妬む者達、即ち「前編」の3086/87行で登場した「一人の有力な公爵と四人の伯爵」である。

3）不義密通を疑われているトリスタンと王妃イザルデの関係について、である。

4）der valant. ゴットフリートも、メロートにこの語を用いている。「忌忌しい小人、悪魔の手下」daz vertane getwerc, des valandes antwerc（14515 f .）と。

5）トリスタンは、病気を装って家に引き籠り、3491行以下（注13を参照）の方法で監視の目を掠め、王妃との逢瀬を続けているのである。

6）写本H（3439－43）とD（3438、3441－43）によれば、この部分は次の通りである。「これは王には実に辛いことで（写本D）/聞くに堪えなかった。/王は彼の進言に従い/その場にいた者たち皆に/狩りの用意をするよう/命じた（写本H）」Bartsch は、この部分が断片Mでは省略されたものと想定している。しかし、原注によれば、1）散文民衆本トリスタン（以下Pと略記）のテキストにはその痕跡が無く、2）この箇所は単に他の行の繰り返し（3441＝3446、3442＝3445）から成ることが、写本H、Dでの加筆を物語っている。

7）マクデブルク断片3の表は、この3452行の途中で断絶しているので、3452－56行と3463行はレーゲンスブルク断片rの2によって補うことにする。3463行（訳文では便宜上3457行とした）は、Wagner による行数表示では、断片 Rr2 の9行目であり、3456行はその直前の8行目に当る。

8）ゴットフリートの作では、少々事情は異なる。マルケ王が20日間の予定で狩猟に出掛けるとき、トリスタンは病気と称して同行せず、その間に注13の方法で王妃と「8日で8度」の逢瀬を重ねる。しかし一夜、マルケ王から二人の監視を命じられていた小人メロートに密会の現場――相手の婦人が誰かは分らなかったものの――を見られ、その翌日の真夜中、マルケとメロートが樹上で2人を待ち伏せするに至るのである。

9）ゴットフリート作では、「オリーブの木」 ein olboum（14612）である。

10) 原文には引用符が無いが、明らかに小人の言葉であるので、断片 Rr2 に従って補った。
11) 3466行に始まる小人の言葉はここまでである。引用の終止を示す括弧が原文には欠けているので、断片 Rr2 によって補った。
12) 写本D、Hには「王は傍らの木の枝に馬を繋いだ」と記されている。
13) 印を付けた木片を小川に流すのが、トリスタンとイザルデの取り決めた逢瀬の合図である。ゴットフリートでは、トリスタンがこの方法をブランゲーネから教わり、オリーブの枝を削った木片の片側(面)にトリスタンの頭文字T、別の側(面)にイゾルトの頭文字Iを記す約束である。
14) 原文にも断片 Rr2 にも欠けているが、写本D、Hには有る。写本Dによれば「王と従者(小人)は、相変らず木の上にいた」である。
15) 原文では、この3510行の途中から3517行の途中まで欠落しているので、この部分を断片 Rr2 によって補った。3517行はマクデブルク断片4の表の第一行に当るが、訳文では断片M3裏に含めてある。
16) 原文は、3555行の途中で切れている。以下3559行までは断片 Rr2 によって補う。この Rr2 もまた3559行半ばにして中断しているので、この行は更に写本D、Hを参考にして補った。
17) トリスタンの言葉である。原文の…] doch wesin leit を、写本D : Hirvmme las dir wesin leit と写本H : Vnd lauß dir doch wesen laid によって補った。
18) 3591行(原文では3594 und mich ze ritter vazzit)は、字義通りに取れば、上の3586/87の内容と一致しない。原注によれば、写本D、HとPの記述に基づいて、ここと次行は、

und mir …ritter vazzit/und gift in ros und perit

「私に(…名の)騎士を付けてくれ/彼ら騎士に馬を与えてくれる」

となるべきものである。騎士の数は、まちまちでHでは10名、Dでは100名、Pでは1000名である。「馬」ros und perit は、Pでは「鎧と馬」harnasch vund pferd と記されており、意味からすれば、こちらの方がふさわしいようである。
19) 3576−79から察せられるように、天下に勇名を轟かせているトリスタンを滞在させることで、マルケ王は、外敵の侵入を未然に防ぎ、国の安全を確保している。言い換えれば、マルケは、トリスタンを担保として、領国の平和を借りているのである。担保を請け出すとは、このような関係を解消して、トリスタンをマルケの領国から立ち退かせることであろう。
20) 原文 so wold ich […を、P : so wil jch zehand dz land raumen (1862 f .) によって補った。
21) クルヴェナルが、トリスタンに語る言葉である。原文の7064行は、…] stille の一語のみであり、欠ける部分は、写本D、H及びベルリン写本(略号B)によって補ってある。写本Bについては、「前編」の「はじめに」でも言及していないが、これは、写本D、Hと同じく15世紀のものであり、6103行から後の部分を含んでいる。
22) Kagenis. ゴットフリートでは、カーエディーン Kaedin であり、大公ヨヴェリーンの息子、白い手のイゾルトの兄、トリスタンの友人にして義兄である。注25と26を参照。
23) 2人が王妃イザルデに会いに出掛けたとき、トリスタンは首尾よく彼女と一夜を共にするが、カーゲニースの方は、お目当ての婦人と同衾しながら、眠りを誘う不思議な枕の為に朝まで眠り続け、悔しい思いをする。これが原因で口論となり、2人の間にはわだかまりがあったのである。
24) 注28を参照。写本Hだけが on zorn「腹癒せにではなく」である。
25) カーゲニースの妹、即ちゴットフリートの作では「白い手のイゾルト」は、既にトリスタンとの婚礼を済ませてはいたが、妻とは名ばかりで、このときまで処女のままである。
26) ゴットフリート作では、アルンデール公国(ブルターニュとイングランドの間に位置する)の大公ヨヴェリーンにあたり、カーエディーンと白い手のイゾルトの父である。
27) トリスタンが、娘を名のみの妻にしておいたことを、一族全体に対する侮辱と感じていたからである。
28)「王妃の名にかけて」呼び止められたにもかかわらず、トリスタン(実はクルヴェナルたち)が逃げ去ったことを聞き、王妃は激怒する。トリスタンは乞食に扮して王妃に会い、この誤解を解こうとする

が、全く相手にされず――王妃は乞食の正体を見抜いていながら――従者に殴られたうえ追い払われるのである。

29) 9月29日である。

30) 写本Dでは、ブランゲーネと明記されている。

31) 原文では garzun であるが、同じ人物が7188行では knape と記されているので、小姓と訳した。Benecke/Müller/Zarncke の辞書（I. 484[b]）によれば、馬には乗らず徒歩で行くのが garzun の特徴で、しばしば使者に遣わされ、騎士に従って盾と槍を持ち運び、先駆けして騎士の席を用意したりする、とのことである。ピローゼ（Pylose または Pilose、7307行では Piloise）と呼ばれているこの人物は、ゴットフリートの作品には登場しない。

32) 原文は unde unbekant genuge である。しかし原注にも記されているように、「あまり人に知られていない」ことが、このピローゼを使者にとりわけふさわしいと思わせる取柄であるかどうか、疑わしい。物語のその後の経過を辿っても、この点が生かされておらず、むしろ逆に1）トリスタンがピローゼを見て、即座に王妃の使者と認めること2）ピローゼが役目を果して戻った時、彼が手に入れてきた富をマルケ王が訝しむこと、と矛盾するからである。それ故ここでは敢えて、原注が、原文の本来の姿であろうと推定している unde ir bekannt genuge を訳出した。

33) ein hemede herin. 懺悔のために着るものである。herin（＝haerin）の意味は、Benecke/Muller/Zarncke には、von haaren と記されているだけである。この断片 St の7319行 Daz sie die heren uz zie では、die heren が ein hemede herin の意味で用いられており、これには原注がある。それによると、断片 St にのみ遺され、辞書類にも記載されていないこの女性名詞形が、Windberger Psalmen（Hrsg. Graff, Quedlinburg 1839）の中に見られ、cilicium の訳語であることを、Leitzmann が証明しているとのことである。cilicium 本来の意味を活かそうとすれば、「山羊の毛皮の肌着」となるが、むしろ着心地の悪さを強調して訳語のようにした。ゴットフリートの作で、イゾルトが「粗い毛皮の肌着 ein herte hemede haerin」(15660) を着るのは、神明裁判（赤熱する鉄を素手で摑む）を受けるときである。ヴォルフラムの Parzival の中でも、恋人の亡骸を埋葬した庵で隠者として生きるジグーネが、灰色の衣の下にこの「毛皮の肌着 ein hemed haerin」(437、24) を身に付けている。

34) Karechte を Karecht の三格と解した。写本によってこの名はまちまちである（D: Karahes, H: Karkes, B: Karck, P: Careches)。ゴットフリートでは、このカレヒトに当るのが、アルンデール公国にある大公ヨヴェリーンの居城カルケである。

35) 写本D、Bでは、この2行もトリスタンの言葉である。「そうする勇気は無い/それが私の為にならないのなら」(写本D)

36) この7284行から7287行まで2行飛んでいる。原注によれば、Lichtenstein が、並行する異文を誤って続けて印刷し、存在しない2行分だけ増やしたからである。

37) この箇所は、写本D、H、B何れにも備わっているが、テキストはそれぞれ異なる。写本Bによれば「お妃さまは悲しんでおられますし/あの肌着は大層苦痛を与えるからです」である。

38) schilling. 1シリングは12ペニヒ、20シリングが1ポンドである。しかし通常これは、計算を容易にするために想定された貨幣にすぎないとのことである。

39) Sancte Mychele Alagrevie (7422行では Sante Michele Alagrevie)。原注によれば、この地名は、実際の地理上の連想――ブルターニュの海岸にある Mont St. Michel には、海峡を挟みコーンウォールの西端で St. Michael's Mount が向き合っている――に基づいている。Alagrevie は、a la greive（＝im Watt）の誤記であり、「砂州にある」という本来の意味が理解されず、その代りに「伯爵 grave, greve」と関連付けられている。その場合「伯爵領にある in der Grafschaft」というほどの意味になるが、写本Bのテキストで唐突に「伯爵」が現れる――Da jarmarckt was jn einer stat/Einen graffen ich da güttes bat/Der gab mir gütliche「ある町で年の市がありました。/私はそこである伯爵に贈り物を求め、/その方が気前よく私にくれたのです」(7423－25)――のもこの為である。

40) Tyntariol. ゴットフリートでは、ティンタヨール Tintajol。コーンウォールのマルケ王の居住地及び

城である。コーンウォール西海岸にあり、今日 Tintagel と呼ばれ、伝説の英雄アーサー王誕生の地ともみなされている。

41) stumpe schu. 特に農民、職人、巡礼者が履いた靴であり、当時流行の先の尖った靴に対して無骨な身形とみなされる。

42) Tynas. この人物は、ゴットフリートの作には登場しない。

43) 7449行では pelegrim が用いられているが、ここでは wallere であり、クルヴェナルが同行しているにもかかわらず、単数の扱いである。写本D、H、Bでは複数扱いとなっている。

44) 〈zu〉 Blanklande. 「blankenlande の短縮形か」との原注がある。現に、D：〈czu〉 Blanckinlande、H：〈ze〉 Blanckenland、P：〈gen〉 blanckenland である。ベルールの原文では、la Blanche Lande (または la Lande Blanche) であり、現代ドイツ語訳の訳者 Mölk は、これに das Weiße Land の語を当てている。文字通り「白い土地」である。ここでは佐藤輝夫氏の「トリスタン伝説」「トリスタン・イズー物語」での訳語を拝借した。